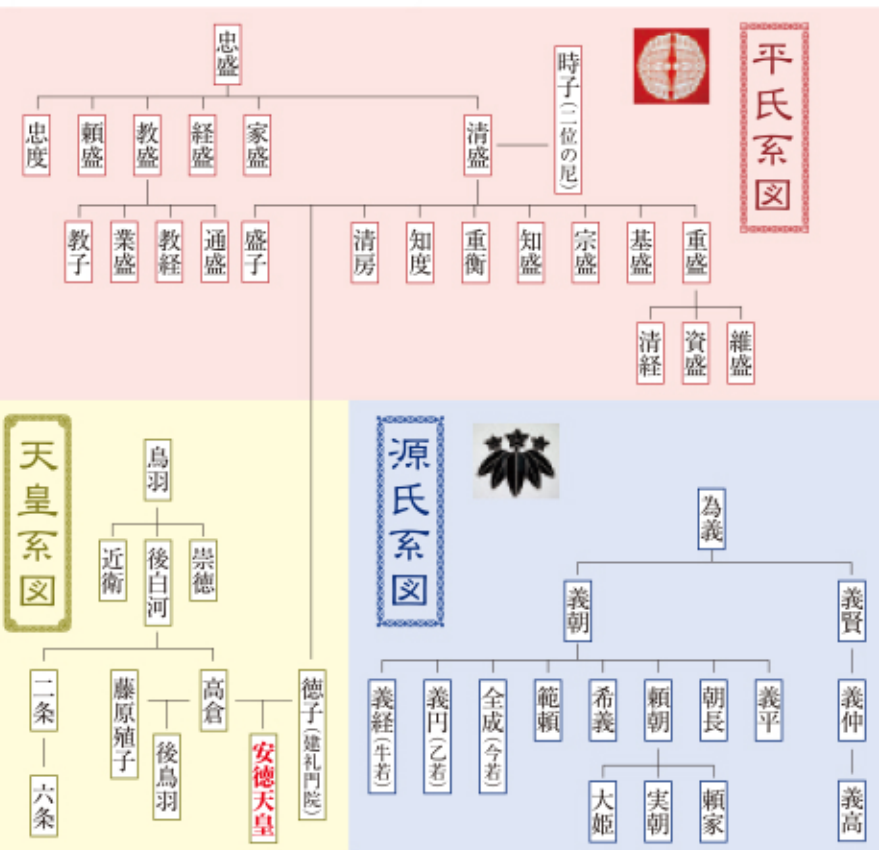


壇ノ浦の戦い(1185年)

治承4年(1180)に源頼朝が平家打倒の兵をあげた。5年に渡る源平の戦いの最中、養和元年(1181)閏2月4日に平家の頭領、平清盛は病没した。源平の戦いは、寿永4年(1185)3月24日の壇ノ浦の戦いで終焉を迎える。義経の陣は満珠・干珠島に、対する知盛は門司の田野浦に船団を集めた。「吾妻鏡」によると、その数、平家は500、源氏は840余艘といわれる。彦島を本拠地とする知盛は、得意の海上戦で挽回を狙った。初戦は東流れの潮流に乗り、戦いを有利にしていたが、昼近く潮流が西に変わりはじめると接近戦となり、さらに義経が平家軍の水子・舵取りを射させて混乱させ、戦況は逆転した。当初平家は御座船に見立てた擬装船を囲にする作戦をとったが露見、目標を定めた源氏が優勢になるにつれ、平家方から源氏へ裏切る者が相次いだ。平家きっての武将、平教経は、義経を討とうとして追いつめたが、俗にいう「八艘飛び」で味方の船に逃れ、果たせなかった。敗戦を覚悟した二位の尼は、源氏が奪還を狙う三種の神器を身につけ、「海の底にも都はあります」と8歳の安徳天皇を抱いて入水した。後を追った帝の母建礼門院は助けられて囚われの身となった。勝敗がついたのは午後4時、知盛はじめ主だった武将は一門の最期を見届けると、次々に入水したが、平家の総帥、宗盛親子は捕虜となって戦いは終わった。関門海峡には、ただ、おびただしい平家の赤い旗印が漂うばかりであった。栄華を極めた平清盛の一族は歴史上からその姿を消し、再び表舞台に立つことはなかった。

【平家・源氏・天皇主な人間関係】



【源平合戦】



観どころ

下関 Shimonoseki Area

ベイ・エリアに広がる数々の楽しいスポットと街のあちこちに点在する洋館や史跡。新旧の魅力が詰まった唐戸地区。土塀や石畳が美しく、緑の木陰に包まれた城下町長府。下関地区には風情のある見どころがたくさんある。



門司港 Mojiko Area

古き良き時代を懐かしむ門司港レトロ。かのアインシュタイン夫婦も宿泊した旧門司三井倶楽部をはじめ、明治から大正にかけての洋館がノスタルジックな街並みと、美しい夜景は魅力いっぱい。山手地区には日本の風情が香る街並みも残っている。



観光案内

音声観光案内 携帯ガイドプレーヤー貸出中!

関門の観光スポットを気ままに散策していただくため、BGM付きで素敵な声の観光案内が聞ける「携帯ガイドプレーヤー」を貸し出しています。料金は1日400円です。

身長: 6.8cm  
体重: 45g

浪漫マップに完全対応!!

案内箇所は53箇所!

関門海峡浪漫マップ  
関門地区の観光スポットを余すところなく紹介。裏面には、関門トンネル人道の通行記念スタンプ押印欄が!

関門TOPPA! 記念証  
人道トンネルの下関側・門司側のエレベーターホール内に設置している記念スタンプを押印して下記案内所に提示すると、「関門TOPPA! 記念証」がもらえます。

携帯ガイドプレーヤー貸出場所	関門 TOPPA! 記念証 進呈場所	TEL	営業時間
下関駅観光案内所	○	083-232-8383	9:00~18:00
新下関駅観光案内所	○	083-256-3422	9:00~18:00
下関観光情報センター(旧秋田商会ビル)	○	093-231-4141	9:30~17:00
カモンワープ	○	083-228-0330	9:00~18:00
長府観光会館	○	083-246-1120	9:00~18:00
門司 旧門司三井倶楽部	○	093-321-6191	9:00~17:00
門司港 旧JR九州本社ビル1階観光案内所	○	093-321-6110	9:00~18:00

交通アクセス



お問い合わせ  
**関門海峡観光推進協議会**  
〒750-0008 下関市田中町5-6(下関市観光政策課内) TEL.083-231-1350  
〒801-0852 北九州市門司区港町9番11号(北九州市門司港レトロ課) TEL.093-322-1188  
関門海峡Navi <http://www.kanmon.gr.jp/>



**源氏・平氏 略年譜**

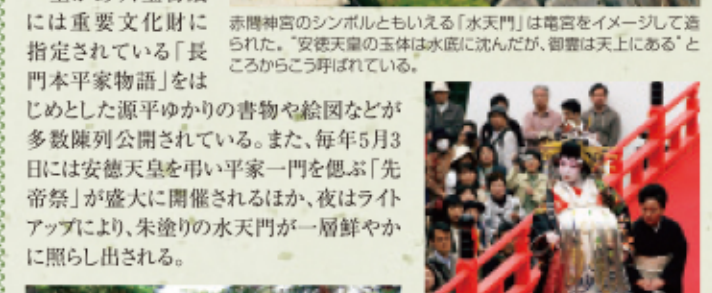
- 一一八八年 平清盛誕生。
- 一一八九年 源頼朝誕生。
- 一一九〇年 清盛、安芸守(安芸国の国司)に任命される。
- 一一九一年 後白河天皇に味方し「保元の乱」に勝利。
- 一一九二年 源義経誕生。平治の乱起こる。源義経の父、源義朝らが平家、清盛に破れる。
- 一一九三年 清盛(五十歳)太政大臣となる。平家全盛。高倉天皇即位。
- 一一九四年 清盛の娘徳子入内、高倉天皇の女御となる。
- 一一九五年 中宮徳子に清盛の孫になる皇子安徳天皇誕生。
- 一一九六年 清盛、後白河法皇を幽閉。
- 一一九七年 安徳天皇即位。高倉宮以仁王の平家打倒の令旨。
- 一一九八年 頼朝、義経、木曾義仲率兵。
- 一一九九年 石橋山の戦いで源朝を敗る。「富士川の戦い」で源氏軍と対峙。清盛、後白河法皇の幽閉をとく。高倉上皇没。
- 一二〇〇年 後白河法皇が院政を再開。清盛六四歳没。平家政権消滅。「倶利伽羅峠の戦い」で義経が平家軍を破る。平家、安徳天皇三種の神器を奉じて西国へ都落ち。後白河法皇、頼朝に東国支配院宣。平家、大宰府に入る。門司柳ヶ浦(天里)に仮御所を造る。義仲(三二歳)敗れる。義経(三二歳)敗れる。「一の谷の戦い」で義経に敗北。「屋島の戦い」で義経に敗北。壇ノ浦の戦いで「平家滅亡」。安徳天皇入水。頼朝、義経暗殺を命ずる。義経(三二歳)自害。頼朝征夷大将軍に任じられる。頼朝(三三歳)没。





### 1 古に思いを馳せる旅 赤間神宮

平清盛の孫である安徳天皇を祀る赤間神宮は、明治維新までは阿弥陀寺と称していた。有名な「耳なし芳一」の物語の舞台にもなっており、境内には平家一門の塚である七盛塚や、芳一像を安置した芳一堂があり、宝物殿には重要文化財に指定されている「長門本平家物語」をはじめとした源平ゆかりの書物や絵図などが多数陳列公開されている。また、毎年5月3日には安徳天皇を祀る平家一門を偲ぶ「先帝祭」が盛大に開催されるほか、夜はライトアップにより、朱塗りの水天門が一層鮮やかに照らし出される。



赤間神宮のシンボルともいえる「水天門」は電宮をイメージして造られた。「安徳天皇の玉体は水底に沈んだが、御霊は天上にある」ところからこう呼ばれている。



先帝祭「土御門」

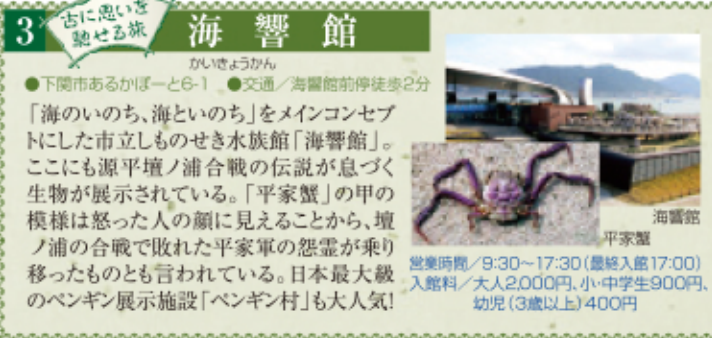
壇ノ浦合戦で生きながらえた平家の女官たちは遊女に身を落とすながらも、毎年安徳天皇の命日には、身を清め参拝した。以来、連禊とこの行事は続き、今日にいたる。



安徳天皇阿弥陀寺被幼く亡くなった安徳天皇のお慰で、中国地方唯一の御殿。引き上げられたご遺体は、伊崎町にある17御旅所と呼ばれる地にとます安置されていた。

### 2 古に思いを馳せる旅 海峡ゆめタワー

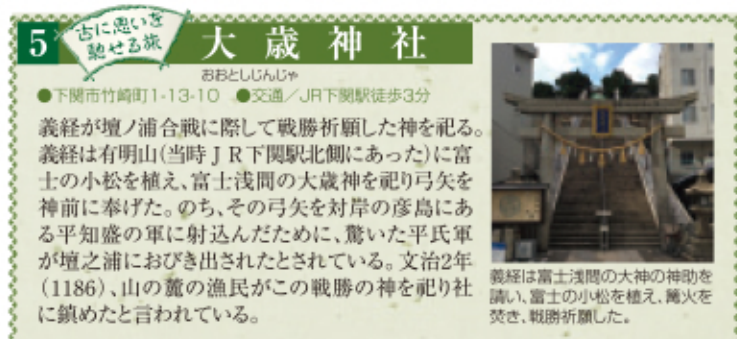
「海峡ゆめタワー」の展望室は、日本有数の高さ(143m)を誇り、関門海峡はもちろんで、対岸の九州や日本海側が一望可能。特に巖流島や壇ノ浦古戦場の絶好のビュースポット。「恋人の聖地」に認定され、「緑結び神社」や「恋みくじ」などが人気。また、夜のパリエーションに富んだライトアップも必見。



営業時間 / 9:30~21:30 (最終入場21:00) 入場料 / 大人800円、子供300円

### 4 古に思いを馳せる旅 平家の一杯水

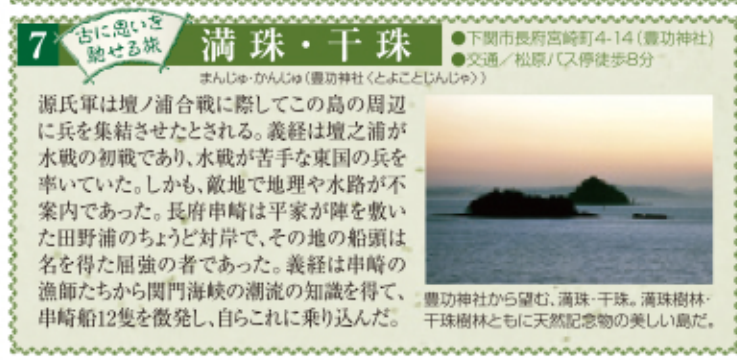
壇ノ浦合戦で肩と足に矢を受け、海に落ちた一人の平家武将が、命をかけて岸にたどり着き、この場所でわずかな湧き水を見つけた。喉がカラカラに乾いていたその武将は、痛む体をひきずって近づき、水を飲んだ。武将にとっては命がけの水であった。夢中になって二口目を口にしたら、真水が塩水に変っていたという伝説が残されており、現在は鳥居が建てられている。



壇ノ浦合戦の際に戦勝祈願した神を祀る。義経は有明山(当時J下関駅北側にあった)に富士の小松を植え、富士浅間の大歳神を祀り弓矢を神前に奉げた。のち、その弓矢を対岸の彦島にある平知盛の軍に射込んだために、驚いた平氏軍が壇ノ浦におききだされたとされている。文治2年(1186)、山の麓の漁民がこの戦勝の神を祀り社に鎮めたと言われている。

### 5 古に思いを馳せる旅 大歳神社

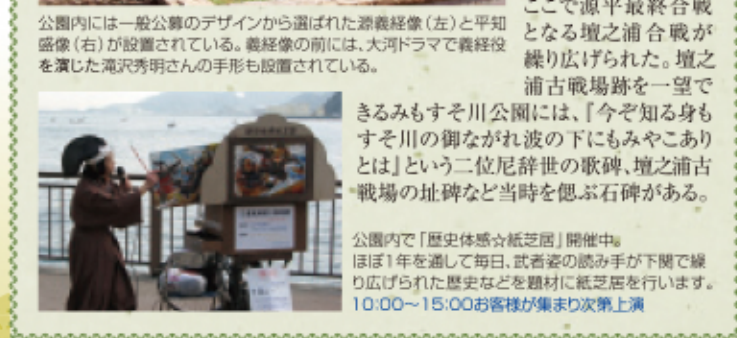
源平最後の合戦となった「壇ノ浦古戦場跡」をはじめ関門海峡を一望することができる絶好のビュースポット。瀬戸内海国立公園の一角に位置する標高268mの小高い山で、夜景は1000万ドルの価値があるとされるほどの絶景である。



季節限定でロープウェイが運行されます。(片道/大人300円/子供150円)

### 6 古に思いを馳せる旅 火の山

源平最後の合戦となった「壇ノ浦古戦場跡」をはじめ関門海峡を一望することができる絶好のビュースポット。瀬戸内海国立公園の一角に位置する標高268mの小高い山で、夜景は1000万ドルの価値があるとされるほどの絶景である。



季節限定でロープウェイが運行されます。(片道/大人300円/子供150円)



**こぼれ話 海豚(イルカ)**  
壇ノ浦の戦いの最中、関門海峡にイルカの大群が現れる。安倍晴延といふ博士(陰陽師)に尋ねれば、「イルカが源氏の舟の下を通過し、源氏の敗け、反対ならば平家」と占った。イルカは平家の舟の下をくぐったという。

**こぼれ話 平家塚**  
「平家塚」は平家落人の墓と伝えられているもので古い五輪塔6基のほかの墓石がある。また、ここは「平家やぶ」ともいわれ、かつては一歩でも入ると祟りがあるといわれていたが、現在は地元の方の手で供養されている。

**こぼれ話 五輪の塔**  
平安時代に創始され、多くが武士層によって造立。上から「空・風・火・水・地」を表し、宇宙の生成要素を説く仏教思想に基づいています。平家供養塔など小型の「一石五輪の塔」は西日本に多い。

**こぼれ話 消えた宝刀**  
義経は海中に沈んだ剣を探そう。海女の老松に命じた。海女が海に潜ると大蛇が現れ「この剣はもともと竜宮城の宝物。日本国には渡さない」とお腹に入れてしまった。その後も壇ノ浦には光り輝くものがあると噂が流れたという。

**こぼれ話 義経の八艘飛び**  
牛若丸として鞍馬山で過ごした義経は、天狗と共に修行したといわれるだけあって、壇ノ浦でも舟から舟へ飛び移った。八艘飛びは有名な話である。三種の神器を探すのに必死だった義経が敵を避けて飛び回っていたとの説もある。

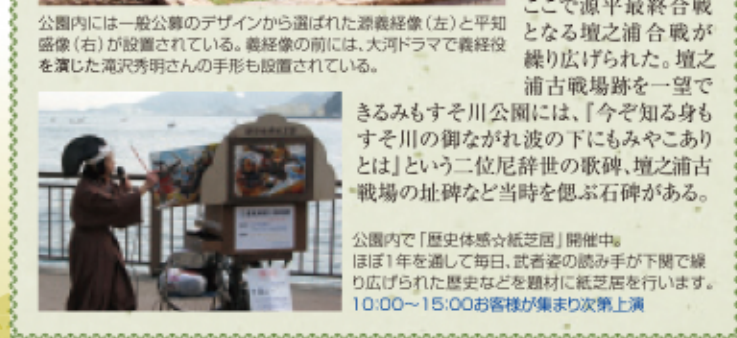
### 3 古に思いを馳せる旅 海響館

「海のいのち、海といのち」をメインコンセプトにした市立しものせき水族館「海響館」。ここにも源平壇ノ浦合戦の伝説が息づく生物が展示されている。「平家蟹」の甲の模様は怒った人の顔に見えることから、壇ノ浦の合戦で敗れた平家軍の怨霊が乗り移ったものとも言われている。日本最大のペンギン展示施設「ペンギン村」も大人気!

営業時間 / 9:30~17:30 (最終入場17:00) 入場料 / 大人2,000円、小・中学生900円、幼児(3歳以上)400円

### 7 古に思いを馳せる旅 満珠・干珠

源氏軍は壇ノ浦合戦の際にこの島の周辺に兵を集結させたとされる。義経は壇ノ浦が水戦の初戦であり、水戦が苦手な東国の兵を率いていた。しかも、敵地で地理や水路が不案内であった。長府申辯は平家が陣を敷いた田野浦のちよと対岸で、その地の船頭は名を得た屈強の者であった。義経は申辯の漁師たちから関門海峡の潮流の知識を得て、申辯船12隻を徴発し、自らこれに乗り込んだ。



豊功神社から望む、満珠・干珠。満珠樹林・干珠樹林ともに天然記念物の美しい島だ。

**こぼれ話 消えた宝刀**  
義経は海中に沈んだ剣を探そう。海女の老松に命じた。海女が海に潜ると大蛇が現れ「この剣はもともと竜宮城の宝物。日本国には渡さない」とお腹に入れてしまった。その後も壇ノ浦には光り輝くものがあると噂が流れたという。

**こぼれ話 義経の八艘飛び**  
牛若丸として鞍馬山で過ごした義経は、天狗と共に修行したといわれるだけあって、壇ノ浦でも舟から舟へ飛び移った。八艘飛びは有名な話である。三種の神器を探すのに必死だった義経が敵を避けて飛び回っていたとの説もある。

### 9 古に思いを馳せる旅 水天宮

壇ノ浦合戦で平家経の奥方(海御前)は敵將を切り捨てて安徳天皇の後を追って海に身を投げた。その遺体は大積の浜に漂着。里人は、浜の松の根元に手厚く葬り、水天宮として祀った。海御前はいつしかかっぱの総帥になったと言われ境内には海御前の墓やかっぱの石像がある。



海御前の墓

### 10 古に思いを馳せる旅 甲宗八幡宮

貞観2年(860)清和天皇が創建。神功皇后が三韓を征した時に着用したと言われる甲が御神体。50年に1度公開され、今回の公開は2058年。寿永4年(1185)源平の戦い後、範頼、義経兄弟は戦いで荒れた社殿を再建した。また、「平知盛の墓」と伝えられる石塔があり、昭和28年の大水害の時に筆立山から流れて来たそうだとされている。



平知盛の墓

### 11 古に思いを馳せる旅 平山観音院

壇ノ浦に敗れた平家残党が、一族を弔うため回向堂を建立したのが平山観音院の起りといわれている。この寺の境内には、「お乳水」と言われる岩清水がある。平山観音院の近く、伊川の貴船社には、安徳帝を偲んだと思われる幼帝、二位の尼、平宗盛の像が小さな祠に安置され、その姿は戸上神社の御神像とほぼ同じ。



貴船社の三尊像(非公開)

### 14 古に思いを馳せる旅 壇ノ浦合戦壁画

和布刈公園内の第二展望台にある、高さ3m長さ44mの美しい有田焼の壁画。壇ノ浦合戦の様子が再現されており、義経、経教、二位の尼、安徳帝、建礼門院などが描かれている。和布刈神社は仲哀天皇9年(西暦200年)に創建。毎年旧暦元旦に行われる和布刈神事は有名。眼前は急瀬瀨巻く早瀬の瀬戸。高浜虚子はこの潮流を見「夏潮の今退く平家滅ぶ時」と詠んだ。句碑は境内にある。



句碑

### 12 古に思いを馳せる旅 柳の御所(御所神社)

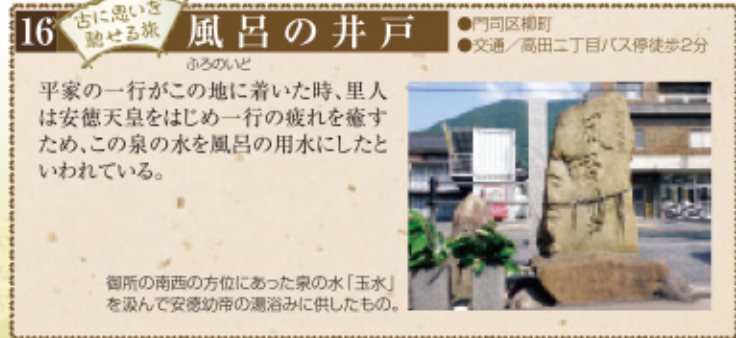
太宰府に落ちた平家は緒方三郎惟義の裏切りにあい、山鹿城(芦屋)を経て、大里に御所を定めた。時に寿永2年(1183)8月、去ったのは同年10月。境内には都を偲んだ平時忠、経正、忠度の歌碑三基があり、とくに忠度の「都なる九重の内恋しくは柳の御所を立寄りてみよ」は御所の存在を明らかにしている。



この周辺には一族の邸もあつたと伝えられている。

### 15 古に思いを馳せる旅 殿墓

黒川の八木田前バス停の奥、竹林の中に整然と並んだ18基の五輪の塔は、「殿墓」と呼ばれている。寿永4年(1185)命を受けて宇佐八幡へ戦勝祈願に行った平休は、その帰途平家の敗戦を知って山中へ潜んだ。追討がゆるんだところで、「八木田」と姓を変えて農業に従事、一方討死した一族の墓を集め、供養したのが殿墓である。



八木田という姓は、耕地に厩を構え、八方に木を植え風を防いでいたところから。